

〔シンポジウム「大隈に手紙を寄せた人びと——大隈重信へのまなざし」〕

## 『大隈重信関係文書』の活用のために

——利用者の立場から——

真 辺 将 之

はじめに

この小論では、大学史資料センターで刊行された『大隈重信関係文書』全一一巻を、どのようにして活用していくべきかということ、利用者としての立場から考えてみたいと思います。

五百旗頭先生、大庭先生のテーマにくらべ、私が扱うこのテーマは一番楽なものかもしれません。たとえば、旅行に例えてみるといいでしょう。旅行しようと考えて、一番楽しい時間というのは、ガイドブックを買って、それをもとに、行程を立てる時ではないでしょうか。今回の『大隈重信関係文書』は、いわば歴史研究のガイドブックです。

私はこれを前にして、ああでもない、こうでもない、好き勝手に語るだけです。しかし、実際にガイドブックを読み込んで、仔細に行程を立てようとすると、交通手段の関係でここにはいけない、お金の関

係でこれではできない、とさまざまな制約が出てきます。歴史研究も同じです。実際に読んでみたら、ここは史料がなくてよくわからない、明らかにできないということが多々出てきます。歴史研究はそのような苦しさを持っていきます。五百旗頭先生、大庭先生のご論考はそうした厳しい制約のなかで出されたものですから、ぜひ味読いただけだと思います。それに対して私の議論では、あくまでこれからの利用にあたっての「夢」を語るものですから気楽なものです。ただ、無責任に夢ばかり語っても仕方ありませんので、歴史研究はそう簡単なものではないのだよ、ということを示すという意味でも、この『大隈重信関係文書』を利用する上での注意すべき点や問題点などにも、なるべく触れるようにして論を進めていきたいと思えます。

それでは、この『大隈重信関係文書』全一巻を紐解いていくうえで、どのようなことに留意すべきでしょうか。それは大きく二つに分けられると思えます。一つは、これらの手紙が宛てられた、大隈という人物の特性をよく理解するということです。大隈という人物がどういう人物かを知らなければ、うまく読み解くことができません。そしてもう一つは、この関係文書が編纂物であるということに留意することです。編纂物のメリットを享受しつつ、しかしその編纂方針を信用しきらずに、その編纂物の性質やそのもとなった原史料群（図書館所蔵の大隈文書）のはらむ問題点を見ておく必要があると思えます。まず前者から見ていきましょう。

## 一 大隈重信という人物の特質

大隈という人物の特徴とは何でしょうか。まず、非常に政治生命が長く、活動分野も幅広いことが挙げられます。明治元年から大正期に至るまで、五〇年以上にもわたって、中央政治に関与しつづけてきました。したがって、大隈を研

究することで、近代史の長期的変動や、さまざまな分野の側面を見ることが可能です。しかし、同時にこれは難点でもあります。つまり、大隈の全体像を把握することは至難であり、ほとんど個人で大隈のすべての活動を把握しつくすということは難しいということもいえます。今回の『大隈重信関係文書』の刊行も、何人もの研究者がそのために雇われて作業に従事し、そして一一年もかけてやっと完了したものです。ましてやそれをほかの史料と照らし合わせながら、大隈の活動を把握するということになる、一人では到底なしえるものではありません。

さらに、政治という一分野だけを見たとしても、その長い生涯において、大隈の地位には大きな変動があります。明治一四年の政変で政府を追放されるまでは政府の中枢にいましたが、政変後は政党を足場に活動することになります。そして政党にかかわっていた時期のうち多くの期間、在野の立場にありました。この地位の変動は、『大隈重信関係文書』にも反映されています。史料群の性格が、政変前後でがらっと変わるのです。政変前は、政治に関する重要情報が多く含まれています。政変後には一挙にそれがなくなってしまう、かわって、大隈系政党の人々や、無名の民衆からの要求などが増えます。このあたりが、伊藤博文関係文書や山県有朋関係文書とは、かなり性格が異なります。藩閥政治家の関係文書には民衆からの書翰は大隈文書ほどに多くはありません。一四年政変以降、明治後期になるにつれての大隈文書はいわば社会との接点を明らかにするという意味で貴重です。しかし一四年政変以前のものはそのいう使い方は難しいでしょう。

またやや言い難いことですが、政治史の史料という観点からいえば、伊藤文書にくらべると、大隈文書は少々内容が薄い、重要情報が少ないということが指摘できます。特に政変後はそうです。しかし、大隈が野に下ったことだけが理由ではありません。なぜ重要情報が少ないかといえば、政変によって政府を出ただけでなく、そもそも大隈が文字を書かなかったということが影響しています。つまり大隈から何かを差し出しての返事というものは少ない。大隈

この手紙のやり取りは基本的に一方通行です。以前大学史資料センターに勤務していたとき、時々、これは大隈の書いたものではないか、見てほしいというような依頼があったりしました。たしかに大隈が出した手紙も数は少ないながらあるのですが、ほとんどは代筆で、ときどき印刷物もあつたりします。お宝だと思つたら、それでもなかつたとわかつて、がつくりして帰つていかれた方もいました。そういう手紙にはやはり情報量が少なく、通り一遍のことしか書いていないことが多いのです。通常であれば、ある政治家宛の書翰があれば、それに対してその政治家が発信した書翰もあるはずですから、それで情報を補つて、往復を併せ読むことで書翰の意味を読み取っていくということがなされるわけですが、これが大隈の場合にはできないのです。つまり、政治的なコミュニケーションのとり方が、大隈は他の政治家と全く異なつていて、そのことが、大隈文書の情報量の少なさにもつながっていると考えられるのです。

しかしこのことは結構大事な問題でして、こうした書翰を通じたコミュニケーションの少なさ、情報の一方通行性というものが従来の大隈研究に問題を引き起こしている、と言えます。大隈の側が何を考えていたのか、という情報が少ないために、大隈の研究でありながら、大隈自身の史料が使えないのです。たとえば明治一四年の政変では大隈の事実上の政敵である、佐佐木高行の日記がよくつかわれます。ただし、佐佐木という人物がどういふ人物かを考えれば、大隈を批判的な目で見ている人であることは間違いありません。そこで考えてみてほしいのですが、その場にいない人の悪口を言うときに、どのように話しをするでしょうか？まず、自分の話に信ぴょう性をもたせるように話すでしょう。相手がそんな話本当かな、こいついい加減なことを言うやつだなと思つては、悪口を言う意味がないからです。そして悪口を言う場合、多くの場合、話を「盛る」、つまり、面白くしようしたりいかに相手が悪いかを強調したりするために、話を膨らませるといふこともよく行われることです。つまり、対立する陣営のなかで流

布されている噂のなかには、実像とかなり異なる大隈像が描かれている可能性があります。火のないところに煙は立たないのかもしれませんが、火と煙とは全然違うのです。原敬日記についても同じことが言えます。歴史学者は大隈嫌いが多いのですが（笑）、それは政治史研究者の多くが目を通す原敬日記に大隈の悪い噂が書かれており、その原敬日記の大隈像に研究者が引きずられてしまうからという側面もあるように思います。

また国会図書館憲政資料室で持っている三島通庸関係文書や、東京大学が持っている中山寛六郎関係文書というように、政府の密偵による報告書を含む文書群が存在します。それは政府が警察をつかって政党の動向を探偵し報告したものののですが、それらには大隈の行動が詳細に報じられていたりして非常に興味深い記述がなされています。ですけれども、本当にそれが信用できるかどうかという問題があります。例えば、一八八七年二月六日付三島通庸宛伊藤博文書翰（三島通庸関係文書九三・五）には次のように記されています。

爾来不得拜晤候処不相変御繁劇之事と拝察仕候陳は本日御送付有之候探聞書に島田三郎之談話なりとて小生伊東巳代治を福沢諭吉へ遣し海防費献金を催したりとは無根之造言而已ならず十四年変更後一語之言辞を交へたることなく殊に巳代治は福沢と識面一縁も無之ものに有之候此等之事往々虚実全く相反する浮説流言の弊恰如捕風に候得共不知其情者或者疑惑を抱くの虞なきに非ず贅事には有之候間御注意迄と為念申入置候尚万一も御聞込之事有之候得は時に御連報是祈候勿々頓首

二月六日

博文

三島殿

果たして元の探偵が島田三郎から直接話を聞いたかすら疑わしく、探聞書・密偵報告の内容がいかに危ういものであるかを示しているように思います。いわゆる隈板内閣時の尾崎行雄の「共和演説」について、後年尾崎が次のよう

に回想している例もあります。

共和演説の時に、探偵が色々な報告をしたと云ふものだから、警視總監に注文して探偵の報告を見せよと談判した、見ると嘘ばかり書いてある、驚くべきものです「共和と云ふ言葉を述べる時には、流石の尾崎も蒼ざめて顔色なし」と云ふやうに、顔つきまで書いてある、商売とは云ひながら、まるで小説家ですね。「尾崎行雄氏談話速記」、広瀬順皓編『憲政史編纂会旧蔵 政治談話速記録』第二巻、ゆまに書房、一九九八年、三四四頁）

他にも、同じ事柄について、内容の異なる複数の密偵報告が寄せられている場合もあります。たとえば、一八八七年に尾崎行雄が洋行した際の資金の出所について、三島通庸文書五四〇・五口の「探聞」には三菱の岩崎弥太郎が出金したという情報が出ています。しかし同じ三島通庸文書に収められた五四〇・一一の無題の探聞書では、「尾崎行雄の洋行費は三千円にして大隈伯が出金したるなり尾崎行雄が横浜出港の前日に大隈より朝吹英二に極内々にて該金額を託し朝吹より尾崎に渡たるなり」とあります。この場合は情報が二つあるので、我々は、どちらが本当かわからないな、この情報は危ういなというように判断できるわけですが、これももし片方しか残っていなかったらどうでしょうか。疑わずに飛びついてしまうかもしれません。ほかに、東大の中山寛六郎関係文書のなかにも、板垣退助の動向について相互に矛盾する情報が書かれている例が指摘されています。

密偵は、尾崎の言葉を借りていえば情報で「商売」をしています。それなのに見えるべき情報がなければどうなるでしょうか。その密偵は無能の烙印を押されてしまいます。それを避けるべく、裏の取れていない信憑性の低い情報が報告されたり、場合によっては捏造がないともいえません。つまり、密偵情報には虚偽の情報が含まれている可能性がおおいにある、ということです。これらをもとに従来の研究がなされているとすると、ずいぶん危ない点が多くあ

るのではないでしょうか。やや密偵情報について力を入れて論じましたが、これは、近年の研究で、密偵史料に記されたことを何らの史料批判もなく史実として記述している研究が多いからです。特に大隈の場合、大隈が手紙を書かない、大隈側の情報が少ないために、そういうことになりやすい側面があります。しかし今述べましたように、密偵史料は非常に危うい史料だということを知っておく必要があります。密偵史料はあくまで「そうした報告がある」という参考程度に止めるべきで、もしそれを史実の根拠として使用するならば、そのたびごとにしっかりとした検証が必要だと思います。話を大隈文書に戻せば、書翰以外のほかの資料と突き合わせて書翰を読解する必要があるのですが、しかし大隈側の発した史料が少ないという状況があるがゆえに、どうしても安易に危うい情報に飛びついてしまいがちになる、そこに気を付けなくてはならないということであるわけです。さきほど『大隈重信関係文書』には情報量が少ないと申しましたが、それでも、大隈側の史料がこれだけまとまって活字化されたことは大きいと思います。従来、敵対者の側の噂の域を出ない史料を用いた大隈像をいかにして修正していくか、ということが課題であるし、そのために『大隈重信関係文書』を、ほかの史料と注意深く組み合わせる利用していくことが期待されるといえるでしょう。

ふたたび大隈という人物の特徴に戻りましょう。大隈は前半期においては、人前に出て話をするということをあまりしません。立憲改進黨の創立大会でも、若干の挨拶をしただけで、後年のように雄弁を振るってはいません。しかし明治の半ばを過ぎてから、大隈は人々の前に出て演説を行うようになり、次第に演説の名手としての声が高まります。メディアの発達ともあいまって、大隈の談話が連日のように新聞に掲載されるようになります。『福沢諭吉全集』のように、早稲田でも『大隈重信全集』をつくるべきだ、という意見も時々耳にするのですけれども、実際には、明治後半期以降、さまざまなメディアに大隈の談話と称するものが出ていて、それを網羅することはほとんど不可能で

す。さらに、それらのメディアに書かれた大隈の談話が、必ずしも正確だとも言えません。というのも、当時の新聞は多くが政治的な色をもっていて、大隈の談話もその政治的な色に応じて着色されてしまっている可能性があります。この辺りに注意し、メディアの性格を充分に把握しながら手紙を読み解いていくならば、社会に向き合った大隈の在り方、あるいは、社会の側から大隈がどう見えていたか、という研究などを拓いていく余地はおおいにあるように思います。

第二次大隈内閣や、大隈の国葬に際しての国民からの圧倒的人気を考えるならば、大隈の政治的リソースとしての民衆の意識や、大隈の社会的基盤の在り方を読み解く材料としても『大隈重信関係文書』は使うことができるわけです。いままで政治家の資料群がそのように使われた事例はあまりないように思います。その意味では、『大隈重信関係文書』を用いることによって、大隈そのものの研究だけでなく、社会にとつての大隈というような、従来にない研究を切り開いていくことが可能なのではないかと考えます。

## 二 編纂物としての『大隈重信関係文書』

さて次に史料集そのものの性格について考えたいと思います。『大隈重信関係文書』は、いうまでもなく、人の手がいったん入った「編纂物」です。編纂物を利用するにあたっては、編纂の性格・特色をよく把握する必要があります。

今回のこの『大隈重信関係文書』は、書翰については、年賀状などを除きすべて翻刻して掲載しています。以前の日本史籍協会は、書翰全体の四分の一以下しか収録しておらず、また明治一四年の政変以前ものが多くを占めていましたので、それに比べると、大変に多くものが収録されたということができます。しかし逆にいえば、書翰ではな

いもの、つまり書類は入っていない、ということでもあります。書類については、かつて早稲田大学社会科学研究所から『大隈文書』全五巻が刊行されていますが、全体からみればごく一部ですし、明治前期のものに大きく偏っています。つまり多くの書類ははまだ活字化されていないということです。

書翰とは何のためにやりとりされるものでしょうか。書翰で行われるのは、主に情報提供です。あるいは、腹の探り合いを行なったりもします。ただ、大隈の場合は、自分で手紙を書きませんから、こうした腹の探り合いのようなことは少ないということが出来るでしょう。また大隈の場合、明治一四年の政変以降は、政黨員や民衆など、社会からの手紙が多いという特色があるということは既に述べましたが、ということは、社会からの要求、お願いのようなものが多いということが出来ます。何をしたか、ではなく、何をしてほしいか、ということですから、さきほど述べた社会にとつての大隈、ということとはわかつて、大隈の側の状況はなかなか出てきません。大隈研究の材料としてこれを使うためには、大隈が手紙にどう対処したかということを探ることが必要でしょう。さらにいうならば、重要な決定を、手紙で済ますことはほぼありません。重要な問題ほど、顔をつき合わせて決める、というのが政治では一般的です。ですから、書翰からだけではみえないものがあります。ですから今回翻刻されていない書類の部とあわせて読み解いたり（そのなかには後述するように、もともと手紙と一緒にになっていたものも多くあるはずですが）、さらには公文書や新聞記事なども照らし合わせることによつて、書翰の意味や、大隈の書翰への対応を解明していく必要があります。

今回翻刻された『大隈重信関係文書』は、差出人の名前の五十音順に整理されています。特定の人物と大隈の関係をまとめてみるには便利ですが、大隈の活動を時系列的に追う上ではとても不便です。以前出された史籍協会版のものは年代順であり、大隈の活動を追う上で大変便利でした。また、若干ですが大隈文書以外からの関係資料も掲載さ

れていました。ただ、今回のように大部なものと、時系列順に並べるといのは非常に難しいのです。というの  
もいったんすべての解説と年代推定を済ませた上で、並べ替えを行わなくてはならないわけですから、現在の出版状  
況や大学の支援体制などを考えるとほとんど不可能に近いのです。だから五十音順になったのはやむを得ないことだ  
と思うのですが、ここに利用にあたって注意しなくてはならない部分があります。

たとえば、自由党と進歩党とが合同して憲政党をつくり、隈板内閣が成立しますが、その時の総選挙で、大隈が祝  
電を送ったことに対する返礼の手紙があります。これをもし、特定の人物の手紙だけをみると、「あ、祝電の返礼が  
あるということは、この手紙の前に、この人のもとに大隈が祝電を出したんだな、ということは大隈とかなり親しい  
関係だったんだな」と思う方もいるかもしれません。ところが、全体を通じてみると、この合同した憲政党による総  
選挙に際しての祝電の返礼は大量に残存していて、他の多くの人の祝電返礼も残っています。つまり、特に親しくな  
くても大量に大隈から祝電を送っているのだということがわかるのです。年代順に並んでいけばそうしたことは一目  
瞭然でわかるのですが、人物別に分散されているがゆえに、そうしたことが把握しにくくなってしまふ。これはほん  
の一例ですが、年代順でなく人物順になっていることで見えにくくなっている部分があるということに留意しなくて  
はならないわけです。

ほかに、隈板内閣の成立によって、堰を切ったように大隈のもとにさまざまな手紙が来ます。就職斡旋の依頼や  
政策上の要求、また返事がないことに対する苦情などです。一つだけだとそれほどわからないことでも、多数揃うこ  
とによって、あつちからもこつちからも要求があつて、大隈が手足を引つ張られて大変な状況になっていることが初  
めて見えてくるわけです。このように年代順の整理であれば見えてくるものが、差出人別の五十音順だと見えないこ  
とが多々あります。

ですから、大隈の活動を追う上では、年代順の目録が必要です。本文のデータを並べ替えることは技術的には可能なのでしょうけれども、それは本の売り上げにかかわってくることで難しいかもしれません。しかしせめて目録情報だけでも年代順で並べ替えられて、どこかで見るようにしていただければ、利用者にとって相当便利なのではないかと思います。ぜひ大学史資料センターにはその点の情報の整備をお願いしたいと思います。また図書館所蔵の大隈文書の目録情報のうち、今回の『大隈重信関係文書』の出版によって、差出人や年代推定などの誤りが訂正されたものが相当数あります。これをぜひ図書館の古典籍総合データベースの方で訂正してもらいたいと思います。また附言するならば、古典籍総合データベースは原文書を見られるようになって非常に便利なのですが、階層検索や情報の並び替え、詳細検索などもできないようです。これらの環境整備ができれば、『大隈重信関係文書』と併せてその意味を読み解いていく上でも、相当利便性が高まるのではないかと思います。

また今回の『大隈重信関係文書』は、日本史籍協会版と違って、第三者間書翰などの参考資料は収録していません。しかし既に述べているように、書翰の内容を読み解くには周辺情報が必要です。ですから全部を個人でやることは難しいでしょうけれども、特定のテーマなり、特定の時代について研究する上では、そうした第三者情報なども含めて、すべて時系列に並べ替えて俯瞰するという姿勢が必要だと思います。またその際に、書翰の年代情報が重要になりますが、本書でなされた書翰の年代推定を盲信しないことも大事だと思います。年代推定は大変な労力を要する作業であり、これまで年代不明とされていた書翰の多くに、年代が補われていることは、利用者として大変助かるのですが、だからといってそれを鵜呑みにしてはなりません。かつて刊行されていた日本史籍協会版の『大隈重信関係文書』において推定されていた年代から、今回の大学史資料センターの『大隈重信関係文書』において修正されたものが多くあるように、今後、今回の『大隈重信関係文書』の年代推定の誤りも必ず出てくると思います。ですから、利用者と

しては、年代推定について、なぜそのような推定がなされているのかをしっかりと検証したうえで利用することが必要でしょうし、大学史資料センターには、編纂の際の年代推定の資料を何らかの形で公開するとか、問い合わせに対応できる仕組みを整えるなどしていただければ利用者としては大変助かるのではないかと思います。そしてそうした体制が整えられれば、それによって推定の誤りなどについて利用者からのフィードバックを受けられるということにもなりますから、そうした、今後発見される情報などについても、センターのホームページに公開するなどしていただければ、『大隈重信関係文書』の一層の有効活用につながるのではないのでしょうか。

### 三 今後の活用に向けて

以上述べてきた、編纂物としての性格のほかに、もともと大学で所蔵している「大隈文書」自体の性格についても、ある程度把握しておく必要があります。一番重要な問題は、大隈の死後、大学に寄贈されるまでの間に、史料の原秩序に大きな変更が加えられているということだと思います。大隈歿後ほどなく、『大隈侯八十五年史』の編纂が始まりますが、その編纂のために、大隈邸に残っていた文書を市島謙吉が調査し、明治維新の元勳を中心とする、市島が重要と考えるものだけを抜き出して、巻子に仕立ててしまいます。またその後も、文書の一部を近親者に分けたりもしています。こうしたことは市島の手記に記されています（なお、本講演後に、星原大輔「大隈文書の来歴と刊本・謄写資料について」〔『早稲田大学史記要』四七、二〇一六年二月〕が発表されました。市島による整理について触れているほか、それ以前・以後の整理や資料の散逸についても触れていますのでご参照ください）。

さらに大きな問題としては、図書館で所蔵・公開される過程で、書類と書翰とが分離されてしまったことです。も

ととも、手紙単独というよりも、書類に手紙を添えて大隈に提出したものが多くあったのではないかと推測されるわけですが、その場合あくまで中心となるのは書類の方であり、書類なくして手紙の意味を読み解くことはできないわけです。しかし、図書館で目録をつくるまでの間に、それが完全に分離されてしまっているのです。もちろん、編纂の過程でわかったものに関しては、あわせて採録したり、あるいは採録しなくても編者註として記載したりされています。ただ、分かつてないものや、あるいは編集上の誤りもあるかもしれません。だから編者註にあるものだけ見ていればいいというものでもないと考えます。

またやっかいなのは、書翰と書類の中間形態のようなものが多くあるということです。たとえば、罫紙を二つに折りたたんで閉じてあり、見た目は一見冊子体のように見えるけれども、中身をみると、謹啓とか拝啓とかからはじまって、末尾に大隈重信様と宛名が書いてあったり、というようなものが存在します。こうしたものが、ある時には書翰の部に、ある時は書類の部に入っていたりします。こうしたものを収録するかどうかについて、センターではそれぞれ検討した上で判断していると思いますが、それはもともと書翰の部に分類されていたものだけであり、書類の部に分類されてしまったものの多くはおそらく最初から書翰としての検討対象にはなっていないのではないかと思います。さらにいえば、文章の形式は謹啓から始まって、署名・宛名で終わっていても、中身は私信ではなく公文書的なものだったりするものも多くあります。当時は公私の区分があいまいな部分もありますから（だからこそ大隈の手元に公文書的な性格を持つものが大量に残されたりするのですけれども）、手紙や書類の形式も明確にどちらかにわけられないものもあります。こうしたなかで、収録範囲から落とされてしまったものについても目を通す必要があり、その意味で、図書館所蔵の史料群は今後も参照される必要があると考えます。また今回は外国人からの書翰についても収録されていません。ここにも重要な情報が残されている可能性もあると思います。

話を原史料の性格に戻しますと、可能であるならば、図書館所蔵の大隈文書を可能な限り原秩序に復元していく作業も進められていく必要があると思います。たとえば、図書館所蔵の大隈文書の書類の部の中には、端に鉛筆で番号や記号が書かれているものがあります。またこれとは別に、スタンプで番号が打たれていたりもします。これらはおそらく整理の過程でつけられたものと考えられるのですが、その番号を補助線にして、どのような整理が加えられたのかを考えることが可能であるかもしれません（やってみなければわからないところがやっかいです）。また市島謙吉の日記や雑記も、こうした復元に参考になる記述が多いのではないかと思います。

市島の日記は図書館の紀要に一部翻刻されていますが、これとは別に雑記のようなものがあり、実はそちらのほうが情報量が豊富だったりします。私はこれを大学院の授業で何年間か読んでいたのですが（それでも読めたのはごく一部でした。それほど大量にあります）、そこには大隈の情報はもちろんのこと、市島はさまざまな文化人と盛んに交流しており、国書刊行会をはじめとする出版事業にもかかわっていましたし、近世の文人の墨蹟などを集める趣味も持っていましたから、近世・近代文化史的にみて重要な情報も豊富です。また早稲田大学史にとっても重要な記述があることもいうまでもありません。ですから、この市島の雑記類を翻刻して出版できたら、非常に有用なものではないかと思えます。私も大学院の授業で読んでから、その情報量の豊富さに改めて気づき、翻刻・出版の作業に取り掛かりたいと思って、図書館所蔵の雑記類の基礎情報を集めたりもしたのですが、費用や人手、さらにそれに割く時間の問題を考えるとなかなか難点も多く、いまだに手をつけられずにいます。『大隈重信関係文書』同様に、大学の事業として刊行できれば、早稲田大学の名前を近代の文化史にさらに深く刻むことにつながりますし、それが一番いいと思うのですが、なかなか難しいことかもしれません。

話を『大隈重信関係文書』に戻しますと、史料学的検討とのつながりでいえば、『大隈重信関係文書』の分析方法

として、様式論的な分析も可能なのではないかと思えます。かつて聖心女子大学の佐々木隆先生が、『伊藤博文関係文書』を題材にして、書翰の宛名・署名の記載様式の数量分析によって、政治家相互の關係性を浮かび上がらせる論文を書かれています（佐々木隆「近代私文書論覚え書―宛名表現にみる政治的關係―」（『年報近代日本研究』一二、一九九〇年一月）、佐々木隆「近代私文書論序説―署名表現に見る政治的關係―」（『日本歴史』六二八、二〇〇〇年九月）。私も、かつて『大隈重信関係文書』のごく一部だけを対象に、そうした分析をして『早稲田大学史記要』に載せていただいたことがありますけれども（『大隈重信関係文書』の近代私文書論的研究」（『早稲田大学史記要』三九、二〇〇八年二月）、これを今回刊行された全体に行う、あるいは署名・宛名以外の様式について分析してみる、ということも可能でしょう。特に、さきほど述べたように、大隈の政治的地位の変動の激しさが、様式との間にどのように関連しているか、政治家だけではなく大隈文書の特色である社会の幅広い人々からの手紙の様式はどうなっているのか、など、『伊藤博文関係文書』での分析では得られない知見が『大隈重信関係文書』で得られる可能性もあろうと思えます。

このほか、教員としての立場でいいますと、『大隈重信関係文書』と古典籍データベースを併用することによって、くずし字解読の教材としての活用も可能になりました。つまり、活字化されたものを回答として、古典籍データベースをみながら、くずし字を読む勉強をすることが可能になったのです。現在のところ、ネット上でこれほどまとまって活字と原本とを対照できるような文書群は、近代史に関しては他にありませんから、大変ありがたいことだと思います。またそうして大隈文書を読んだ人々が、大隈重信研究や、大隈関係の政党や事業に関心を持つようになれば、大隈研究・日本近代史研究の裾野を広げていくことにもつながるのではないかと思います。

またそうやって自分で大隈文書を読み進めた人たちによって、刊本や原本目録情報の誤りなどが見つかる可能性もあると思えますし、あるいは関連する文書が、思いもよらないところで見つかったなどの情報が寄せられる可能性も

あると思います。さきほども述べましたが、そうした情報をどう受け入れ、蓄積し、公開していくかという、フィードバックの仕組みの構築も必要ではないでしょうか。

### おわりに―新たな大隈伝・大隈研究のために

以上好き勝手にいろいろと語って参りましたが、『大隈重信関係文書』の刊行によって、最も期待されるのは、大隈研究の進展であることは間違いないでしょう。特に大隈については、正伝というべき『大隈侯八十五年史』が、伝記としてあまり出来のよいものではないということがありますので（このことについてはかつて『大隈侯八十五年史』の編纂過程とその特質」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』五七・四、二〇一二年二月）で論じました）、それを書き換え、現在の研究水準をふまえた伝記が編纂できれば一番いいのですが、大隈の政治生命の長さ、かかわった事業の多さを考えると、難しい面もあるでしょう。

それを考えるならば、まずは史料状況の整備と、研究者の育成が目下の課題だと考えます。史料状況の整備という意味では、『洪沢栄一伝記資料』という大部の書籍がありますが、あのような形で、大隈のかかわった事業ごとに、史料を集めるということがまずは必要ではないかと思えます。『洪沢栄一伝記資料』は最近インターネットでデータベースが公開され、非常に便利です。同じような形で『大隈重信伝記資料』のような形で情報を蓄積し、データベースのような形で公開され、かつそれを随時更新していくことができるようにすれば、大隈研究の進展に大きくつながるのではないのでしょうか。

またより細かい年譜の整備も大事だと思います。今回刊行された『大隈重信関係文書』の目録情報を年代順に並べ

てデータベース化し、かつ、古典籍総合データベースの目録情報をそこに流し込み、併せて各種一次史料や新聞・雑誌等に見える大隈の動向や論説・談話に関する情報などを結びつけることができれば、著作目録を兼ねた壮大な年譜データベースが出来上がると思います。

もちろん、こうした史料状況の整備には、時間と人手が必要です。このことが研究者の育成ということとかかわってくるように思います。つまり、大学史資料センターで、若手の人材に、こうしたデータベースの構築の仕事をお願いしながら、それを自己の研究の材料ともしてもらうことができれば非常によいのではないのでしょうか。若い人が業務に従事しながら安心して大隈研究、大学史研究に専念し、研究者としての成長を遂げることができるような環境が用意されることが望ましいと思います。そのことは大学にとっても大きな利益になるはずです。近年、大学のグローバル化が叫ばれ、また大学ランキングなどが横行することで、大学というものが単一の物差しで測られる傾向が強くなっているように思います。そうなると、ほかの大学との差異化ということが非常に難しくなってきました。大学の没個性化が進みかねません。そうしたなかで、早稲田大学が存続する意味は何か、早稲田にしかないものは何なのか、ということを考えることは非常に重要だと思えます。それは建学から今日まで歴史的につながってくる学風にはかならないのであり、そこには建学者である大隈重信の影響が極めて大きいことは間違いありません。未来を志向する一方で、それが過去の歴史において培われたものの上に立つものでなければ、早稲田大学が存在する意味はないのです。単にグローバルでランキングが上位ならいいという話ではないだろうと私は考えます。

そうした意味で、私立大学にとって、歴史研究は欠かせません。現在大学史資料センターで行われている大学百五十年史の編纂事業はその意味で非常に大切なものだと思うのですが、これと並んで、建学者である大隈重信の研究も並行して行っていくってほしいと強く考えます。そしてそれは間違いなく、大学の今後を考えるうえで、プラスになる

と考えます。大隈研究者、大学史研究者が育ち、近代史のなかに占めてきた早稲田の位置を確認し、学術的に裏打ちされたものとして提示することができれば、それは歴史ある大学としての早稲田大学のプレゼンスの増大につながりますし、また早稲田に欠けている部分、これからの早稲田に必要な要素を考える材料にもなるでしょう。

いつのまにか早稲田大学の話になってしまい恐縮ですが、やはり大隈研究の基盤の整備という意味では、大学史資料センターの役割が大きく、資料センターがそうした役割を果たすためには、大学がそれを支援することが不可欠です。あえて述べさせていただきました次第です。しかし大学がこうした役割を果たすならば、社会一般の人々にとっても大きな意味を持ちますし、そのことがまた大学の名声の拡大となって大学に返ってくるものだと思います。

さらに、大隈研究の裾野を広げるためには、一般の人々が読みやすい形で大隈の著作を提供する必要もあると考えます。慶応義塾が福沢諭吉をそのような形で推し出しているのに比べ、早稲田はやや控えめだと思います。近々『大隈重信演説座談集』が岩波文庫から出される予定だそうです（講演後の二〇一六年三月に刊行）、とてもすばらしいことだと思います。同じような形で、たとえば、『大隈伯昔日譚』『大隈侯昔日譚』『早稲田清話』などの回顧録をはじめとする大隈の著作を、一般社会の人が手に取りやすい形で出版されることも望まれます。そのことが、一方で早稲田大学への関心呼び起こし、他方で大隈や日本近代史への関心呼び起こすことになり、ひいては、今回刊行された『大隈重信関係文書』のより一層の活用にもつながってくるのではないのでしょうか。

※ 本稿は、二〇一五年一〇月一二日、大隈記念講堂小講堂にて開催されたシンポジウム「大隈に手紙を寄せた人びと——大隈重信へのまなざし」での口頭報告に、加筆修正を加えたものである。また、本研究はJSPS科研費（課題番号二六三七〇八〇二、一三七二〇三三〇）および早稲田大学特定課題研究費（課題番号二〇一六K一〇九〇、二〇一四K一六〇七四）による研究成果の一部である。